

# 形態学的なこだま

角 田 健 一 (大 塚)

Kenichi (Tajyo) Tsunoda

二〇一六年一月、国立新美術館でダリ展を参観した。ダリ展を参観するのはこれで二度目である。記録を辿ると二〇〇六年にも上野の森美術館でダリ回顧展（生誕一〇〇年記念）が開催されているので、この時以来となる。

サルバドール・ダリは「偏執狂的批判的方法」を生み出したことで有名である。これを自身の定義上で「精神錯乱的な連想と解釈の批判的かつ体系的な客観化に基づく非合理的な認識の自然発生的方法」とした。これはまた「ダブルイメージ」などによって表現されるが、とりわけ『記憶の固執』は有名でカマンベールチーズと時計をダブルイメージしたものとされる。

「狂人と私の違いは、私が狂っていないことだ。」とダリは言ったそうである。実際に精神科への入院を勧められたこともあったようだが、彼の作品は決して我を失い、狂い、思いつきで作品を制作されたものではない。ダリが目指したのは「天才」である。そして天

才になるためには天才を演じなければよいと考えた。そんな逸話が残っていると、狂気ですら緻密に計算されているのではないかと思わせる。そしてその練られた構成・構図に、ルネサンスの巨匠らの伝統的な技巧・技法を吸収し、自らの思想・幻想を入れ込んだ。そうしてダリという独特な作風が成立しているのだろう。そもそも、ただ思いつきでいい加減に制作された作品は評価されるはずもなく、世に残らないだろう。作家の本当の意図はわからずとも鑑賞者に訴える何らかの力を持ち合わせることは、どんな名作にも共通する。

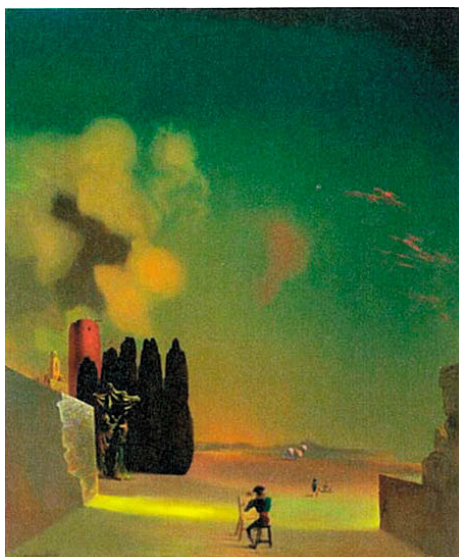
ダリ自身の思考や作品表現は底知れないものを感じざるを得ない。一方で他の歴代有名画家を採点する（自身を含む）など、反面で「分析」とも取れる行動も多く見られる。実際にミレーやフェルメールといった作家に大きな影響を受けるこの感受性は、よく知られる奇行とも取れる大胆な行動と表裏一体のものなのかもしれない。

ダリの作品で私は『謎めいた要素のある風景』が最も好きである。

「私は気は触れていないが、それでも直ちに左手を切り落とすくらいにはできる。ただし条件がある。イーゼルに向かって描くフェルメールを、十分そばで観察させてもらう、というのがその条件だが、納得できる条件ではないか？」（『ダリ・私の五〇の秘伝』）とフェルメールへの想いは強烈である。手前にフェルメール、奥に見えるセーラー服を着た小さな少年がダリ本人である。この小さなダリには一体何が見えているのだろう。

さて、ダリは一九三〇年代以降「形態学的なこだま」という技法を取り入れるようになる。この技法は同一形態を異なるものに変化させて繰り返し返すことで、全体的の調和を図ったといわれる。今展では『奇妙なものたち』や『アン・ウッドワードの肖像』などがその代表作として展示されていた。「形態学的なこだま」に関してはあくまでも構図としての意図が強いように思われる。先の肖像画も依頼されたもので、ここにダリの思想や考えは他の作より多くは取り入れないだろう。

稚作はこの「形態学的なこだま」の要素が書に取り入れられないだろうかと試みた作であるが、いざ書となると作意が前面に出過ぎるくらいがあり、また悩ましい問題である。この効果を期待し金文を素材とし横長の紙面に収めたが、結果このようなものになった。



謎めいた要素のある風景



謎めいた要素のある風景

(いずれも <https://www.salvador-dali.org/catalogue/index.php> より転載)



聞  
雷

53×95cm